「谷崎」を歩く 3

京都・平安神宮

生涯愛した紅しだれ

「来年の春もまたこの花を見られますように」。細雪の姉妹たちが願った枝垂桜（4月10日、京都市左京区の平安神宮神苑で）

京都・平安神宮神苑の八重紅枝垂桜は満開を迎えていた。かれんな八重の花が無数に付いた枝は滝のように地面まで垂れ下がり、薄紅の天蓋に包まれたようだ。

＜皆が一様に、

「あー」

と、感嘆の声を放った。＞

谷崎潤一郎が「細雪」で描いた姉妹らの花見にならって4月14日、平安神宮の應天門をくぐった。丹塗りの大極殿が東山連峰の新緑に映える。

谷崎が初めてこの地を訪れたのは1912年（明治45年）4月。文壇で地位を確立しつつある25歳の新進作家は滞在記にこうつづった。＜平安朝の生活に憧れる人々に取って、此の建物は絶好の企てゞあらう。私は京都に滞在して居る間、何度も何度も此処を訪れて、じッと石甃に腰を据ゑつゝ遠い古へを偲ばうと思ふ＞

京都訪問は平安神宮の創建から17年後。まだ新しい建物を＜丁度歌舞伎の大道具を見るやうな感じ＞とも評した。

「東京遷都で衰退を恐れた京都が存在意義を打ちだそうと古都のイメージを演出したのが平安神宮。谷崎はそれに気がつきながら、幻想を自由にふくらませ、作品に反映した」と、京都大の藤原学・助教（谷崎研究）は話す。

関東大震災で関西に移住した谷崎は生涯を通じて春になると、平安神宮に花見に出かけた。＜まことにここの花を措いて京洛の春を代表するものはない＞と、「細雪」に記している。

小説の姉妹らと同様、花見の度に谷崎が松子夫人と足を運んだのが、平安神宮にほど近い料亭「鄙亭」（京都市左京区）だ。夫妻は約400年前の創業時からある茅葺きの茶室「くずや」を好み、懐石料理を静かに味わった。

お運びの人が出入りする3畳に、炉が切ってある4畳半が続く。天井が低く、昼間でもほの暗い。谷崎が言う「陰翳礼讃」の美が漂う。

「明治の頃は、ロウソクの明かりだけでした」と、14代目当主の高橋英一さん(72)が案内してくれた。谷崎の生前は修業中だったため面識はなかったが、28歳で当主になった後、しばしば友人らと来店した松子夫人について、「いつもお着物で、とってもお優しくて。すてきな方でした」と面影を思い出す。

平安神宮に花見に訪れた松子夫人（右）。隣は娘の恵美子さん（平安神宮で、昭和10年代半ば撮影）＝芦屋市谷崎潤一郎記念館蔵

庭に面した障子を開いた。トチノキ、松、カエデ――。桜の木が一本もない。

高橋さんは「桜のない庭で緑を眺めた後だからこそ、平安神宮で一気に華やかな桜を見て、喜びが倍増したのではないでしょうか」と推し量る。

谷崎は65年1月、病に倒れ、東京の病院に入院した。回復を待って5月に京都に向かった。平安神宮の桜を見るためだったが、すでに散っていた。2か月後、神奈川県湯河原町の自宅で79年の人生の幕を閉じた。

松子夫人は、随筆「倚松庵の夢」で、亡き夫に思いをはせる。＜いずこの花にもまして平安神宮の紅しだれに此の世を去っても、愛着を残していることであろう＞

帰り際、くずやの中から見えなかった裏手の苔の緑に桜の花びらが散り敷いているのを見つけた。

谷崎の死後、どこからか運ばれた種が敷地に落ち、花を咲かせるようになったという。

（木須井麻子）

メモ　平安神宮神苑は近代の名庭園師で「植治」の屋号で知られる7代目小川治兵衛（1860～1933）が手がけた。琵琶湖疏水を引いた池やせせらぎを巡りながら、桜に始まり、初夏のカキツバタやハナショウブなど四季折々の趣向が目を楽しませる。枝垂桜の開花は毎年4月初旬。咲き始めは紅色が濃く、満開になる頃、薄いピンク色に移り変わる。11代目小川治兵衛さん(68)は「艶やかで気品があり、舞妓さんのように初々しい。ルーツは王朝文化に通じ、文豪を魅了したのでは」と話す。

オリエンタルホテルのメニュー（昭和初期）

神戸旧居留地のオリエンタルホテルは、「細雪」で、三女・雪子の見合いや家族そろっての食事の場として登場する。目にも鮮やかなメニューは、ホテルでのぜいたくな時間をよみがえらせてくれる。石戸信也氏蔵。

（井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員）

芦屋市谷崎潤一郎記念館（兵庫県芦屋市伊勢町12の15）で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和―よみがえる『細雪』の世界―」で展示